

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01204

研究課題名（和文）ギリシア・アラビア・ラテンにおける新プラトン主義思想の伝播と発展

研究課題名（英文）Transmission and Development of Neoplatonic Thought in the Greek, Arabic, and Latin

研究代表者

小村 優太 (Komura, Yuta)

早稲田大学・文学大学院・准教授

研究者番号：20726822

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、古代末期に勃興した新プラトン主義という思想潮流を主題として、それらがギリシア、アラビア、ラテンという三つの異なる、しかし同時に連続した影響関係にある言語思想圏において、どのように伝播し、それぞれの文化的背景のなかで独自の発展を遂げていったのかを明らかにした。また研究期間中には、プロクロス、ディオニュシオス、アヴィセンナ、エックハルトといったテーマを中心としたシンポジウムを開催し、それぞれの研究成果を広く知らしめることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新プラトン主義という、一般的には哲学史のなかで補助的な役割と認識されている思想潮流にかんして、その多文化、多言語にわたる広がりを明らかにすることにより、哲学史においてこれまで等閑視されてきた流れに新たな光を当てることができた。また全般的にギリシア語、アラビア語、ラテン語という、日本語においてアクセスの困難な原典に基づいた研究をひろく日本語において発信し、シンポジウムの開催などを通じて一般向けのアウトリーチも積極的におこなうことができた。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the intellectual movement of Neoplatonism, which emerged in late antiquity. It examined how Neoplatonic thought was transmitted and uniquely developed within three distinct yet interconnected linguistic and intellectual traditions: Greek, Arabic, and Latin. The research clarified the ways in which Neoplatonism spread across these regions and evolved in response to their specific cultural contexts. During the research period, symposia were held, concentrating on key figures such as Proclus, Dionysius, Avicenna, and Eckhart. This event successfully disseminated the research findings, significantly increasing awareness of the unique contributions and developments within Neoplatonic philosophy across these diverse intellectual landscapes.

研究分野：アラビア哲学

キーワード：新プラトン主義 プロクロス デイオニュシオス アヴィセンナ アルベルトゥス・マグヌス エックハルト 原因論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

9世紀にバグダードのキンディー・サークルで成立したと考えられる『純粹善について』は、5世紀の新プラトン主義哲学者プロクロス『神学綱要』のアラビア語翻案である。このアラビア語文献は、12世紀ごろにラテン語に翻訳され『原因論』という名で中世スコラ哲学に伝わった。研究分担者たちはこれらを「原因論文献」と呼び研究に取り組んできた。原因論文献は、アリストテレス主義と並ぶギリシア以来の伝統であるプラトン主義が、古代から中世に至るまでどのように読み継がれたのかを知るうえでも重要な文献である。とりわけ、アルベルトゥス・マグヌスやトマス・アキナスが注解を残し、西洋中世に与えた影響は大きい。それにもかかわらず、原因論文献がもつ思想の内実にはかるべき注目は与えられてきたと言いつらい。その理由として相互に関連している三つの原因を挙げられるであろう。第一に、言語の壁である。本研究が対象とする領域のためには、ギリシア語、アラビア語、ラテン語に通じている必要がある。そのため個々の言語の範囲内での研究は進んでいるが、横断的で本格的な研究ははまだ実現されていない。第二に、ギリシア・アラビア・ラテン語での横断的な研究があったとしても、翻訳の技術に関わる問題 (Endress, Proclus arabus. 1973) であつたり、そうした翻訳を促す社会状況 (Gutas, Greek Thought, Arabic Culture. 1998) などに限られてきたという点。哲学概念がどのような思想背景や理解のもとで翻訳されていて、その意味がどのような変容を被っているのかといった哲学的な研究にまで踏み込まれることはなかったのである。最後に、原因論文献の研究を阻害してきた壁が、決定的な校訂版の不在である。アラビア語ではBadawī版 (Al-Aflātūniya al-muḥdathā ‘inda al-‘arab. 19772)、ラテン語ではPattinのラテン語版 (“Le Liber de Causis. Édition établie à l’aide de 90 manuscrits.” 1966) が用いられてきた。その後、新しいアラビア語写本が発見され、同時にラテン語写本の系統図の見直しも必要となっているが、信頼できる校訂本の出版ははまだ実現されていない。そうした問題の現状を踏まえたとしても、原因論文献の哲学史的な重要性に鑑み、その研究に取り組む意義は大いにある。原因論文献とは何だったのか、なぜ長いあいだ哲学・神学者たちの関心の中心にあり、異なる言語・文化・宗教圏に広がり読まれ続けたのか。以上のような問題意識のもとで、共同プロジェクトを組み、上記の問いに答えを与えるというのが研究当初の背景であつた。

2. 研究の目的

古代ギリシアからイスラームを経てキリスト教中世へと流れる思想史を理解するうえで重要なのはアリストテレスであろう。現代の哲学・倫理学者がアリストテレスを知的源泉としてそこに現代的意義を見出すのと同様に、古代から中世にいたるまでの思想家たちはアリストテレスを重要な古典として読んできた。しかしその思想家たちは、3-4世紀のポルピュリオスの注釈以来、意識的にせよ無意識的にせよ(新)プラトン主義的なフィルターを通してアリストテレスを読解してきた。そのため、この哲学史を研究するときに、「プラトン主義」の理解なしには片手落ちになってしまう。本研究は原因論文献の研究をとおして、古代から中世に至るまでのプラトン主義の水脈を明るみに出すことを目的としている。ギリシア哲学、アラビア哲学、そして西洋キリスト教中世の哲学は、連続するにもかかわらずまだ隔絶された状況にある。各領域の専門家が各自の研究を深めつつも互いの領域に接続していることに本研究の独自性がある。また原因論文献という共通するテキストを軸に研究しつつ、言語や思想・文化・宗教的背景の違いに起因する概念の変容や変化に目を配りながら、その影響史の総合的な研究を目指す。各分野に細分化されてしまう閉じられた専門研究や、そうでなくても思想・宗教・言語など特定のパースペクティブに偏ってしまうやや閉塞感のある哲学史研究に、本研究は新たな方向性を創造することが期待されていた。

3. 研究の方法

言語の壁や校訂版の不在といった研究方法や手段の問題については、本研究は専門の異なる6名の共同作業や、現地での写本調査をとおして解決することを試みる。具体的には以下の専門領域をもつメンバーから構成される。

役割氏名 担当する専門領域

研究代表者	小村優太	総括、アラビア哲学における新プラトン主義の受容と発展
研究協力者	矢口直英	アラビアにおける『純粹善について』の形成
研究分担者	西村洋平	後期新プラトン主義思想
研究分担者	袴田渉	東方キリスト教における新プラトン主義の影響
研究分担者	小林剛	13世紀スコラにおける『原因論』及び『神学綱要』の受容

研究分担者	山崎達也	エックハルトを含むドイツ・ドミニコ会における『神学綱要』及び『原因論』の受容
-------	------	--

まずは領域を大きく三つに分け、研究者がそれぞれの専門に根ざしつつ考察を深めて行く。

アラビア哲学領域 [担当：小村、矢口]

第一の領域はプロジェクト全体の核となる領域であり、ギリシアからの受容とラテンへの伝播という点、そしてアラビア内部での独自の思想形成とそこにおける新プラトン主義の影響という点から検討する必要がある。『純粹善について』やプロティノスの翻案である『アリストテレス神学』などが成立した9世紀から、アヴィセンナにいたるまでを扱い、アラビア哲学形成における新プラトン主義思想の寄与について考察する。またアラビア語文献が12世紀にラテン語に訳されることで、どのような問題が生じたのか、比較検討する。『純粹善について』が作成されたとされるキンディー・サークルは9世紀アッバース朝の宮廷社会、知的環境と密接に関わりながら活動していた。同時代にはシリア語からアラビア語への翻訳を中心に行っていたフナイン・イブン・イスハークの翻訳サークルがあり、他方でギリシア思想との親和性が高いイスラーム神学のムウタジラ派がカリフの庇護のもと隆盛を誇っていた。そのように多文化共生的な環境で生み出された新プラトン主義文献『純粹善について』は、越境的な思想伝播の実例として屹立している。その後『純粹善について』はキンディー学派のアーミリーの注釈を受ける一方で、西方イスラーム地域にも伝播し、古典期アラビア哲学の新プラトン主義的傾向を方向づける重要文献となる。またアラビア哲学そのものがラテン哲学に及ぼした影響の大きさに鑑みれば、アラビア哲学内部での思想展開における新プラトン主義的要素も検討する必要がある。新プラトン主義的傾向の強いキンディー、アヴィセンナについてはその形而上学、宇宙論を中心に詳細な研究をしなければならない。というも『純粹善について』だけでなく、アヴィセンナの哲学大全『治癒の書』もラテン語訳され、スコラ哲学における新プラトン主義受容に影響を及ぼしているからである。そのため、新プラトン主義文献も含めたアラビア哲学全体を俯瞰することで、第三の領域への思想伝播を明らかにする。

ギリシア哲学領域 [担当：西村、袴田]

第二の領域は、9世紀に『純粹善について』として翻案されるまで、おもにプロクロスの思想がどのように読まれていたのかを検討する。具体的には、6世紀のアレクサンドリアで活躍したヨアンネス・ピロポノスによるプロクロスへの論駁書『世界の永続性について』と、恐らく同時代のシリアにて著作したと目される偽ディオニュシオス・アレオパギテスによるプロクロス受容の書『神名論』の研究を中心軸に据え、当時のキリスト教世界における後期新プラトン主義の影響を、その受容と拒絶の両面から探り出す。原因論文献の代表的研究者であるD'Anconaは、シリアのキリスト教徒たちによる新プラトン主義受容が、『純粹善について』成立の背景にあるという解釈を提示している。しかしD'Anconaが提示する証拠は彼女自身が認めるとおり表層的なものであり、さらなる研究が待たれたままである。また9世紀のキンディーにいたるまでには、ギリシア哲学とキリスト教哲学のより豊かな対話がある。ディオニュシオスの著作は、スキュトポリスのヨアンネスや証聖者マクシモスといった「正統派」のキリスト教著作家たちに註解されることで、異端視を免れて、ビザンツ帝国の中心で命脈を保ち続けただけでなく、レシャイナのセルギオスによってシリア語訳されることで、帝国の周縁世界にも伝播していった。こうした伝統を受け継いだのが、8世紀ウマイヤ朝の首都ダマスコで活躍したヨアンネス・ダマスケヌスであり、その思索は彼の主著『知識の泉』において結晶している。『知識の泉』のとくに第1部「哲学の章」を研究し、8世紀のキリスト教世界において新プラトン主義の思想がどのように総括されているのかを確認し、キリスト教とイスラームが初めて出合った時代の思想状況を明確にする。以上のように、6世紀から9世紀にかけて新プラトン主義文献がどのように読まれ・翻訳されたか調査し、初期アラビア哲学において新プラトン主義思想が受容される背景を解明することで、第一領域へと接続する。

西洋中世哲学領域 [担当：小林、山崎]

第三の領域は、原因論文献の西洋中世における受容である。まず、西洋中世を代表するスコラ学者である13世紀のアルベルトゥス・マグヌスとトマス・アクィナスによって書かれた『「原因論」註解』について検討する。そこで次の4点を明らかにする。すなわち(a)アルベルトゥスが『原因論』を解釈する上でイスラーム哲学(具体的にはアヴィセンナ、アヴェロエス、アヴィケブロンなど)がどのような影響を与えたか。(b)逆にアルベルトゥスのイスラーム哲学解釈に『原因論』はどのような影響を与えたか。(c)アルベルトゥスとその弟子トマスの『「原因論」註解』にはどのような共通性、相異性、関係があるか。(d)メルベケのギョームによるプロクロス『神学綱要』のラテン語訳は両者の『「原因論」註解』にどのような影響を与えたか、である。つぎにドイツ・ドミニコ会での受容を、フライベルクのディートリヒとモースブルクのベルトルトに着目して検討する。アルベルトゥスがディオニュシオス文書および『原因論』に関する詳細な註解を著して以来、ドイツ・ドミニコ会の思想家たちは積極的に新プラトン主義を受容してきた。そのなかでもディートリヒは『神学綱要』および『原因論』を頻りに引用している。そこでまずは、『至福直観について』と『知性と知性認識されるもの』におけるディートリヒの独自の

知性論においてどのように新プラトン主義思想が受容されているかを明らかにする。またベルトルトは『神学綱要』に膨大な注釈をほどこしており、この『プロクロス『神学綱要』註解』の詳細な考察が必要となる。これらの研究をとおして、最終的にはこの両者に挟まれるエックハルトの新プラトン主義受容の哲学史的意義を明らかにする。

4. 研究成果

初年度においては本科研メンバー複数人による学会（早大哲学会、新プラトン主義協会）において新プラトン主義の伝播にかんするシンポジウムを行った。また科研メンバーによって運営されているギリシア・アラビア・ラテン哲学会も 2019 年度中に二度開催され、国内の当該領域にかかわる若手を中心とした研究者同士の研究成果の交流が積極的に行われた。

また科研メンバーによって、イタリアのアオスタにおいて写本調査が行われ、本科研において重要なテキストとなるラテン語『原因論』の文献研究についても足掛かりが得られた。全体としての研究発表に加えて、それぞれの科研メンバーによる、新プラトン主義の影響関係にかかわる個別の研究も順調に遂行されている。更に本科研の準備段階として行われていた研究の成果が 2020 年 2 月に刊行された『存在論の再検討』（土橋茂樹編、月曜社）に収録され、本科研に至るまでの研究の流れが広く発信されることになった。

2020 年度はシンポジウム「プロクロスから東方キリスト教へ」をオンラインにて実施し、研究分担者の西村洋平による「神に似るとはいかなることか - - プロクロスの倫理思想」、袴田渉による「ディオニシオスにおける三位一体の神について」が発表された。今年度は新プラトン主義の伝播においても、おもにギリシア地域の展開に焦点を当て、後期新プラトン主義におけるプロクロスから擬ディオニシオスに至る、異教的新プラトン主義からキリスト教的新プラトン主義への展開が検討された。オンラインでの開催であったため、多数の参加者にも恵まれ、コロナ禍という状況においても本研究の研究成果を幅広く伝えることが可能となった。

2021 年度は新プラトン主義と中世ラテン哲学との関係性にかんするシンポジウムを中心として組み立てられた。そのため、研究分担者の山崎達也をコーディネーターとして、国内シンポジウム「ドイツ・ドミニコ会とエックハルト」を Zoom にて開催し、20 名以上の参加者と共に 3 名の提題者による発表が行われた。それぞれの提題者によって、マイスター・エックハルト（1328 頃歿）と、その影響を受けて発展したドイツ・ドミニコ会との思想的関連性が、新プラトン主義という補助線を用いて論じられた。一方で科研プログラム主催の活動以外に目を向けると、中世哲学会においては、「翻訳としての中世哲学」というテーマのもと、研究代表者、研究分担者による企画、発表が行われ、とりわけ研究分担者の西村洋平によって、新プラトン主義者ポルフェリオスの著作にたいするラテン語訳の問題が論じられ、ギリシア語で展開された新プラトン主義思想がラテン語においてどのように再/解釈されたのかが明らかにされた。同じく西村洋平氏によって開催されたプロティノス・セミナーにおいて、プロティノスの論考の精読が行われ、国内のプロティノス研究者をはじめ、多数の参加者に恵まれた。更に研究代表者、研究分担者らが主催するギリシア・アラビア・ラテン哲学会においても、研究分担者たちの発表をはじめとして、多数の新プラトン主義に関連する研究発表が行われ、新プラトン主義研究にかんする国内のコミュニティ形成を推し進めることもできた。

本研究課題は 2022 年度が最終年度となるが、コロナ禍による海外研究者招聘の問題により、2023 年度までの延期を行った。

最終年度となる 2023 年度にイタリアのアヴィセンナ研究者 Amos Bertolacci 氏を早稲田大学および京都大学に招聘し、アラビア哲学と新プラトン主義にかんする講演を 3 度実施し、それによって日本の研究者及び大学院生へのアウトリーチを行い、また Bertolacci 氏との研究連携を行うことにより、今後の研究への展望を確認することができた。具体的には早稲田大学において 2 回、京都大学において 1 回の講演会を実施し、その後は参加者を交えて長時間のディスカッションを行い、いずれも盛況のうちに終了した。

それに先立つ 2022 年度には、Bertolacci 氏招聘にあたって研究代表者および分担者全員で新プラトン主義の最新研究の論文講読を実施し、分担者同士のあいだでの最新研究動向の共有をおこなった。こちらにかんしても、研究分担者同士がそれぞれの専門分野に近い論考をお互いに解説し合うことによって、多人数による共同研究の長所が十分に発揮されたと考えられる。

2022 年および 2023 年に互る長期の展望となったが、最終年度において海外からの研究者を招聘し、若手研究者や大学院生を交えての活発なディスカッションも実施できたことにより、ギリシア、アラビア、ラテンにおける新プラトン主義の発展および展開を明らかにするという本研究の当初目標について、一定以上の成果を得ることができ、また当該分野における将来の日本の研究の発展にたいする新たな礎を築くことができたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山崎達也	4. 巻 -
2. 論文標題 エックハルトにおける神性の形而上学 ドイツ語説教109の哲学的解釈への試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuya Yamazaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Wer ist Lehrer? Die Belehrungslehre des Augustinus	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Schule als Lern- und Lebensraum Nationale und internationale Perspektiven der Schulpaedagogik und Schulentwicklungsforschung. Festschrift fuer Prof. Dr. Barbara Drinck	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小林剛	4. 巻 64
2. 論文標題 アヴェロエス『矛盾の矛盾』における天体の動者について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中世思想研究	6. 最初と最後の頁 41,54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林剛	4. 巻 65
2. 論文標題 アルベルトゥス・マグヌス『「原因論」註解』における神名論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中世哲学研究VERITAS	6. 最初と最後の頁 1,25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林剛	4. 巻 17
2. 論文標題 アルベルトゥス宇宙論におけるアヴェロエス受容	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 カルチュラル	6. 最初と最後の頁 25,41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林剛	4. 巻 66
2. 論文標題 アルベルトゥス・マグヌス『「原因論」註解』訳注(1)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 紀要哲学	6. 最初と最後の頁 39,55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村洋平	4. 巻 64
2. 論文標題 哲学入門と翻訳 ポエティウスの『エイサゴージェ』訳注をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中世思想研究	6. 最初と最後の頁 105,114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小村優太	4. 巻 -
2. 論文標題 イスラーム思想における障害の歴史的分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中東のなかの「障害と開発」	6. 最初と最後の頁 59,77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小村優太	4. 巻 5
2. 論文標題 アラビア哲学と翻訳, 自然言語の限界にたいする挑戦	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 未来哲学	6. 最初と最後の頁 73,89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村洋平	4. 巻 20
2. 論文標題 神は存在もしなければ創造もしない 神・存在・創造をめぐる新プラ トン主義の論理	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新プラトン主義研究	6. 最初と最後の頁 5, 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林剛	4. 巻 64
2. 論文標題 アヴィセンナ『治癒の書』における宇宙の発出について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 紀要 哲学	6. 最初と最後の頁 1, 18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎達也	4. 巻 60-2
2. 論文標題 信における内在と超越 中世スコラ神学から法華思想へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎達也	4. 巻 24
2. 論文標題 フライベルクのディートリヒにおける知性の構成的構造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 通信教育部論集	6. 最初と最後の頁 109, 126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 袴田渉	4. 巻 63
2. 論文標題 書評: 'Filip IVANOVIC : Desiring the Beautiful : The Erotic-Aesthetic Dimension of Deification in Dionysius the Areopagite and Maximus the Confessor	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中世思想研究	6. 最初と最後の頁 97, 103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 袴田渉	4. 巻 23
2. 論文標題 ディオニシオスの三位一体論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 聖カタリナ大学キリスト教研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1, 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小村優太	4. 巻 1
2. 論文標題 存在をめぐる読みの可能性 アヴィセンナ、アヴェロエス、アクィナスの応答	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 未来哲学	6. 最初と最後の頁 153, 168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小村優太	4. 巻 4
2. 論文標題 アラビア哲学とイスラーム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界哲学史	6. 最初と最後の頁 85, 107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西村洋平	4. 巻 19
2. 論文標題 「第27論考「魂の諸問題について第1篇」(IV.3)第1-8章 われわれの魂は万有の魂の部分か」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『新プラトン主義研究』	6. 最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎達也	4. 巻 22
2. 論文標題 「トマス・アキナスにおける悪の原因と宇宙の秩序」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『創価大学通信教育部論集』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小村優太	4. 巻 107
2. 論文標題 「「神学」と「存在論」 古典期アラビア哲学における『形而上学』解釈の歴史」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『フィロソフィア』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小林剛
2. 発表標題 アルベルトゥス・マグヌス『「原因論」註解』における神名論
3. 学会等名 第269回京大中世哲学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林剛
2. 発表標題 アヴェロエス『矛盾の矛盾』における神認識について
3. 学会等名 第29回新プラトン主義協会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 袴田渉
2. 発表標題 キリスト教儀礼における『平和の挨拶』について 偽ディオニュシオスの平和概念
3. 学会等名 聖カタリナ大学キリスト教研究所フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 袴田渉
2. 発表標題 ディオニュシオス『教会位階論』における儀礼とテウールギア
3. 学会等名 第30回新プラトン主義協会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小林剛
2. 発表標題 無からの創造は哲学的に証明可能か トマス・アクィナス、アラビア哲学、アルベルトゥス・マグヌスに即して
3. 学会等名 第72回中世哲学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 自然は観想し生み出す プロティノス魂論における自然の概念
3. 学会等名 カルチュラル・グリーン研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 プロティノス第51論考「悪とは何か、そしてどこから生ずるのか」第15章
3. 学会等名 第2回プロティノスセミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 新プラトン主義の家政論？
3. 学会等名 PAP研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 人間はなぜ知ることを欲するのか 古代末期の知性論
3. 学会等名 第1回古代哲学研究ネットワーク
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yuta Komura
2. 発表標題 Avicenna on Divine Providence and its Relationship to the Problem of God's Knowledge of Particulars
3. 学会等名 Avicenna Study Group III: Surveying the summae: Comparisons and Contrasts among Avicenna's Eight Main Works (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 『純粹善について』の「統括」(tadbir)と古代末期の摂理論
3. 学会等名 ギリシア・アラビア・ラテン哲学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 第30論考「自然・観想・一者について」(III, 8)第8章
3. 学会等名 プロティノス・セミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林剛
2. 発表標題 アヴェロエス『矛盾の矛盾』における天体の動者について
3. 学会等名 中世哲学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林剛
2. 発表標題 アルベルトゥス・マグヌス天体論の諸問題 アヴェロエスからの展開
3. 学会等名 ギリシア・アラビア・ラテン哲学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山崎達也
2. 発表標題 エックハルトにおける神性の形而上学 ドイツ語説教109における哲学解釈への試み
3. 学会等名 ドイツ・ドミニコ会とエックハルト
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 袴田渉
2. 発表標題 神の名としての『生命』 古代キリスト教思想の生命論をめぐる断片
3. 学会等名 、聖カタリナ大学キリスト教研究所フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 神に似るとはいかなることか - - プロクロスの倫理思想
3. 学会等名 プロクロスから東方キリスト教へ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 袴田 渉
2. 発表標題 ディオニュシオスにおける三位一体の神について
3. 学会等名 プロクロスから東方キリスト教へ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 「善が第一原因であるとはどういうことか 新プラトン主義の原因論」
3. 学会等名 早稲田大学哲学会（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 西村洋平
2. 発表標題 「神は存在もしなければ創造もしない 新プラトン主義の発出の論理」
3. 学会等名 新プラトン主義協会（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 山崎達也
2. 発表標題 「エックハルト神学における何故なしの生」
3. 学会等名 仏教思想研究会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 山崎達也
2. 発表標題 「ベルトルトは知性における自己認識をいかに解したのか 『神学綱要』命題168の解釈をめぐって」
3. 学会等名 ギリシア・アラビア・ラテン哲学会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 袴田渉
2. 発表標題 「神が人を『神にすること』について ギリシア教父の神化思想」
3. 学会等名 聖カタリナキリスト教研究所フォーラム
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 小村優太
2. 発表標題 「世界への善の流出 アラビア哲学における最善世界」
3. 学会等名 早稲田大学哲学会（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 小林剛
2. 発表標題 「ラテン哲学における新プラトン主義とアリストテレスに関する一考察」
3. 学会等名 早稲田大学哲学会（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 小村優太
2. 発表標題 「古典期アラビア哲学における創造と流出」
3. 学会等名 新プラトン主義協会（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 土橋茂樹編（西村洋平、小村優太、小林剛執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 248
3. 書名 『存在論の再検討』	

1. 著者名 伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留責任編集（西村洋平執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 238
3. 書名 『世界哲学史2』	

1. 著者名 伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留責任編集（小村優太執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 274
3. 書名 『世界哲学史4』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	袴田 渉 (Hakamada Wataru) (70726588)	南山大学・人文学部・准教授 (33917)	
研究分担者	小林 剛 (Kobayashi Go) (70753846)	聖心女子大学・現代教養学部・非常勤講師 (32631)	
研究分担者	山崎 達也 (Yamazaki Tatsuya) (70838557)	公益財団法人東洋哲学研究所・その他部局等・主任研究員 (移行) (72682)	
研究分担者	西村 洋平 (Nishimura Yohei) (90723916)	兵庫県立大学・環境人間学部・准教授 (24506)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	矢口 直英 (Yaguchi Naohide)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Amos Bertolacci 教授講演会	開催年 2023年 ~ 2023年
---------------------------------	----------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------